

どんぐりと山猫

宮沢賢治

おかしなはがきが、ある土曜日の夕がた、一郎のうちにきました。

かねた一郎さま 九月十九日

あなたは、ごきげんよろしいほど、けつこです。

あした、めんどなさいばんしますから、おいで  
んなさい。とびどぐもたないでくなさい。

山ねこ 拝

こんなのです。字はまるでへたで、墨もがさがさして指につくくらいでした。けれども一郎はうれしくてうれしくてたまりませんでした。はがきをそつと学校のかばんにしまつて、うちじゅうとんだりねたりしました。

ね床にもぐつてからも、山猫のにやあとした顔や、そのめんどうだという裁判のけしきなどを考えて、おそくまでねむりませんでした。

けれども、一郎が眼をさましたときは、もうすっかり明るくなっていました。おもてにで

てみると、まわりの山は、みんなたつたいまできたばかりのようにうるうるもりあがつて、まっ青なそらのしたにならんでいました。一郎はいそいでごはんをたべて、ひとり谷川に沿つたこみを、かみの方へのぼつて行きました。

すきとおつた風がざあつと吹くと、栗の木はばらばらと実をおとしました。一郎は栗の木をみあげて、

「栗の木、栗の木、やまねこがここを通らなかつたかい。」とききました。栗の木はちよつと  
しずかになつて、

「やまねこなら、けさはやく、馬車でひがしの方へ飛んで行きましたよ。」と答えました。

「東ならぼくのいく方だねえ、おかしいな、とにかくもつといつてみよう。栗の木ありがとう。」  
栗の木はだまつてまた実をばらばらとおとしました。

一郎がすこし行きますと、そこはもう笛ふきの滝でした。笛ふきの滝というのは、まっ白  
な岩の崖のなかほどに、小さな穴があいていて、そこから水が笛のように鳴って飛び出し、  
すぐ滝になつて、ごうごう谷におちているのをいうのです。

一郎は滝に向いて叫びました。

「おいおい、笛ふき、やまねこがここを通らなかつたかい。」

滝がびーびー答えました。

「やまねこは、さつき、馬車で西の方へ飛んで行きましたよ。」

「おかしいな、西ならぼくのうちの方だ。けれども、まあも少し行ってみよう。ふえふき、

ありがとうございます。」

滝はまたもどのように笛を吹きつづけました。

一郎がまたすこし行きますと、一本のぶなの木のしたに、たくさんの白いきのこが、どつてどつてどつてこと、変な楽隊をやっていました。

一郎はからだをかがめて、

「おい、きのこ、やまねこが、ここを通らなかつたかい。」

とききました。するときのこは

「やまねこなら、けさはやく、馬車で南の方へ飛んで行きましたよ。」とこたえました。一郎は首をひねりました。

「みなみならあつちの山のなかだ。おかしいな。まあもすこし行ってみよう。きのこ、ありがとうございます。」

きのこはみんないそがしそうに、どつてどつてこと、あのへんな楽隊をつづけました。

一郎はまたすこし行きました。すると一本のくるみの木の梢を、栗鼠がぴよんととんでいました。一郎はすぐ手まねぎしてそれをとめて、

「おい、りす、やまねこがここを通らなかつたかい。」とたずねました。するとりすは、木の上から、額に手をかざして、一郎を見ながらこたえました。

「やまねこなら、けさまだくらいうちに馬車でみなみの方へ飛んで行きましたよ。」

「みなみへ行ったなんて、二とこでそんなことを言うのはおかしいなあ。けれどもまあもす

---

こし行ってみよう。りす、ありがとうございます。」りすはもう居ませんでした。ただくるみのいちばん上の枝がゆれ、となりのぶなの葉がちらつとひかつただけでした。

一郎がすこし行きましたら、谷川にそつたみちは、もう細くなって消えてしまいました。そして谷川の南の、まつ黒な樫の木の方へ、あたらしいいちいさなみちがついていました。一郎はそのみちをのぼって行きました。樫の枝はまっくろに重なりあつて、青ぞらは一きれも見えず、みちは大へん急な坂になりました。一郎が顔をまっかにして、汗をぼとぼとおとしながら、その坂をのぼりますと、にわかにはっきりと明るくなって、眼がちくつとしました。そこはうつくしい黄金いろの草地で、草は風にざわざわ鳴り、まわりは立派なオリーブいろのかやの木のもりでかこまれてありました。

その草地のまん中に、せいの低いおかしな形の男が、膝を曲げて手に革鞭をもつて、だまつてこつちをみていたのです。

一郎はだんだんそばへ行つて、びつくりして立ちどまつてしまいました。その男は、片眼で見えない方の眼は、白くびくびくうごき、上着のような半纏のようなへんなものを着て、だいいち足が、ひどくまがつて山羊のよう、ことにそのあしきときたら、ごはんをもるへらのかたちだったのです。一郎は気味が悪かつたのですが、なるべく落ちついてたずねました。

「あなたは山猫をしりませんか。」

するとその男は、横眼で一郎の顔を見て、口をまげてにやつとわらつて言いました。

「山ねこさまはいますすべに、ここに戻つてお出やるよ。おまえは一郎さんだな。」

一郎はぎよつとして、一あしうしろにさがって、  
「え、ぼく一郎です。けれども、どうしてそれを知ってますか。」と言いました。するとその  
奇体な男はいよいよにやにやしてしまいました。

「そんだけ、はがき見たべ。」

「見ました。それで来たんです。」

「あのぶんしょうは、ずいぶん下手だべ。」と男は下をむいてかなしそうに言いました。一郎  
はきのどくになつて、

「さあ、なかなか、ぶんしょうがうまいようでしたよ。」

と言いますと、男はよろこんで、息をはあはあして、耳のあたりまでまつ赤になり、きもの  
のえりをひろげて、風をからだに入れながら、

「あの字もなかなかうまいか。」とききました。一郎は、おもわず笑いだしながら、へんじし  
ました。

「うまいですね。五年生だつてあのくらいには書けないでしょう。」

すると男は、急にまたいやな顔をしました。

「五年生つていうのは、尋常五年生だべ。」その声が、あんまり力なくあわれに聞えましたの  
で、一郎はあわてて言いました。

「いいえ、大学の五年生ですよ。」

すると、男はまたよろこんで、まるで、顔じゅう口のようにして、にたにたにたにた笑つ

て叫びました。

「あのはがきはわしが書いたのだよ。」

一郎はおかしいのをこらえて、

「ぜんたいあなたはなにですか。」とたずねますと、男は急にまじめになつて、

「わしは山ねこさまの馬車別当だよ。」と言いました。

そのとき、風がどうと吹いてきて、草はいちめん波だち、別当は、急にていねいなおじぎ  
をしました。

一郎はおかしいとおもつて、ふりかえつて見ますと、そこに山猫が、黄いろな陣羽織のよ  
うなものを着て、緑いろの眼をまん円にして立っていました。やっぱり山猫の耳は、立って  
尖っているなど、一郎がおもいましたら、山ねこはびよこつとおじぎをしました。一郎もて  
いねいに挨拶しました。

「いや、こんにちほ、きのうははがきをありがとつ。」

山猫はひげをぴんとひっぱつて、腹をつき出して言いました。

「こんにちほ、よくいらつしやいました。じつはおとといから、めんどうならそいがおこつ  
て、ちよつと裁判にこまりましたので、あなたのお考えを、うかがいたいとおもいましたの  
です。まあ、ゆつくり、おやすみください。じぎ、どんぐりどもがまいります。どうも  
まい年、この裁判でくるしみます。」山ねこは、ふところから、巻煙草の箱を出して、じぶ  
んが一本くわえ、

「いかがですか。」と一郎に出しました。一郎はびつくりして、「いいえ。」と言いましたら、山ねこはおおようにわらって、

「ふふん、まだお若いから、」と言いながら、マッチをしゅっと擦って、わざと顔をしかめて、青いけむりをふうと吐きました。山ねこの馬車別当は、気を付けの姿勢で、しゃんと立っていました。いかに、いかに、たばこのほしいのをむりにこらえているらしく、なみだをぼろぼろこぼしました。

そのとき、一郎は、足もとでパチパチ塩のはぜるような、音をききました。びつくりして屈んで見ますと、草のなかに、あつちにもこつちにも、黄金いろの円いものが、ぴかぴかひかっているのです。よくみると、みんなそれは赤いずぼんをはいたどんぐりで、もうその数ときたら、三百でも利かないようでした。わあわあわあわあ、みんななにか云っているのです。

「あ、来たな。蟻のようにやってくる。おい、さあ、早くベルを鳴らせ。今日はそこが日当りがいいから、そここの草を刈れ。」やまねこは巻たばこを投げすて、大いそぎで馬車別当にいつけました。馬車別当もたいへんあわてて、腰から大きな鎌をとりだして、ざっくざっくと、やまねこの前この草を刈りました。そこへ四方の草のなかから、どんぐりどもが、ぎらぎらひかかって、飛び出して、わあわあわあわあ言いました。

馬車別当が、こんどは鈴をがらがらがらんと振りました。音はかやの森に、がらがらがらがらんとひびき、黄金のどんぐりどもは、すこしずつになりました。見ると山ねこは、もういつか、黒い長い繻子の服を着て、勿体らしく、どんぐりどもの前にすわっていました。まるで奈良のだいぶつさまにさんけいするみんなの絵のようだ。一郎はおもいました。別当がこんどは、革鞭を二三べん、ひゅうばちっ、ひゅう、ばちっとう鳴らしました。

空が青くすみわたり、どんぐりはぴかぴかしてじつにきれいでした。

「裁判ももう今日で三日目だぞ、いい加減になかなおりをしたらどうだ。」山ねこが、すこし心配そうに、それでもむりに威張って言いますと、どんぐりどもは口々に叫びました。

「いえいえ、だめです、なんといつたって頭のとがってるのがいちばんえらいんです。そしてわたしがいちばんとがっています。」

「いいえ、ちがいます。まるいのがえらいのです。いちばんまるいのはわたしです。」

「大きなことだよ。大きなのがいちばんえらいんだよ。わたしがいちばん大きいからわたしがえらいんだよ。」

「そうでないよ。わたしのほうがよほど大きいと、きのうも判事さんがおっしゃったじゃないか。」

「だめだい、そんなこと。せいの高いのだよ。せいの高いことなんだよ。」

「押しっこのえらいひとだよ。押しっこをしてきめるんだよ。」もうみんな、がやがやがやがや言って、なにがなんだか、まるで蜂の巣をつついたようで、わけがわからなくなりました。そこでやまねこが叫びました。

「やかましい。ここをなんとかこらえる。しずまれ、しずまれ。」

別当がむちをひゅうぱちつとならしましたのでどんぐりどもは、やっとしずまりました。やまねこは、ぴんとひげをひねって言いました。

「裁判ももうきょうで三日目だぞ。いい加減に仲なおりしたらどうだ。」  
すると、もうどんぐりどもが、くちぐちに云いました。

「いいえ、だめです。なんといつたって、頭のとがっているのがいちばんえらいのです。」  
「いいえ、ちがいます。まるいのがえらいのです。」

「そうでないよ。大きなことだよ。」がやがやがや、もうなにがなんだかわからなくなりました。山猫が叫びました。

「だまれ、やかましい。ここをなんとか心得る。しずまれしずまれ。」

別当が、むちをひゅうぱちつと鳴りました。山猫がひげをぴんとひねって言いました。

「裁判ももうきょうで三日目だぞ。いい加減になかなおりをしたらどうだ。」

「いえ、いえ、だめです。あたまのとがったものが……。」がやがやがや。

山ねこが叫びました。

「やかましい。ここをなんとかこらえる。しずまれ、しずまれ。」

別当が、むちをひゅうぱちつと鳴らし、どんぐりはみんなしずまりました。山猫が一郎にそっと申しました。

「このとおりです。どうしたらいいでしょう。」

---

一郎はわらってこたえました。

「そんなら、こう言いわたしたらいいでしょう。このなかでいちばんばかで、めっちゃくちゃで、まるでなっていないようなのが、いちばんえらいとね。ぼくお説教できいたんです。」

山猫はなるほどというふうにならずに、それからいかにも気取って、繻子のきものの胸を開いて、黄いろの陣羽織をちよつと出してどんぐりどもに申しわたしました。

「よろしい。しずかにしろ。申しわたした。このなかで、いちばんえらくなくて、ばかで、めっちゃくちゃで、てんでなっていないくて、あたまのつぶれたようなやつが、いちばんえらいのだ。」

どんぐりは、しいんとしてしまいました。それはそれはしいんとして、堅まってしまいました。

そこで山猫は、黒い繻子の服をぬいで、額の汗をぬぐいながら、一郎の手をとりました。別当も大よろこびで、五六べん、鞭をひゅうぱちつ、ひゅうぱちつ、ひゅうひゅうぱちつと鳴らしました。やまねこが言いました。

「どうもありがとうございます。これほどのひどい裁判を、まるで一分半でかたづけてくださいました。どうかこれからわたしの裁判所の、名誉判事になってください。これからも、葉書が行ったら、どうか来てくださいませんか。そのたびにお礼はいたします。」

「承知しました。お礼なんかありませんよ。」

「いいえ、お礼はどうかと思ってください。わたしのじんかくにかかりますから。そしてこれからは、葉書にかねた一郎どのと書いて、こちらを裁判所としますが、ようございますか。」

一郎が「ええ、かまいません。」と申しますと、やまねこはまだなにか言いたそうに、しばらくひげをひねって、眼をぱちぱちさせていましたが、とうとう決心したらしく言い出しました。

「それから、はがきの文句ですが、これからは、用事これありに付き、明日出頭すべしと書いてどうでしょう。」

一郎はわらって言いました。

「さあ、なんだか変ですね。そいっだけはやめた方がいいでしょう。」

山猫は、どうも言いようがまずかった、いかにも残念だというふうに、しばらくひげをひねったまま、下を向いていましたが、やっとあきらめて言いました。

「それでは、文句はいままでのおりにしましょう。そこで今日のお礼ですが、あなたは黄金のどんぐり一升と、塩鮭のあたまと、どっちをおすきですか。」

「黄金のどんぐりがすきです。」

山猫は、鮭の頭でなくて、まあよかったというように、口早に馬車別当に云いました。

「どんぐりを一升早くもってこい。一升にたりなかったら、めっきのどんぐりもませてこい。はやく。」

別当は、さっきのどんぐりをますに入れて、はかつて叫びました。

「ちようど一升あります。」

山ねこの陣羽織が風にばたばた鳴りました。そこで山ねこは、大きく延びあがって、めを

---

つぶって、半分あくびをしながら言いました。

「よし、はやく馬車のしたくをしろ。」白い大きなきのでこしらえた馬車が、ひっぱりだされました。そしてなんだかねずみいろの、おかしな形の馬がついています。

「さあ、おうちへお送りいたしましょう。」山猫が言いました。二人は馬車にのり別当は、どんぐりのますを馬車のなかに入れました。

ひゅう、ぱちっ。

馬車は草地をはなれました。木や藪がけむりのようにぐらぐらゆれました。一郎は黄金のどんぐりを見、やまねこはとぼけたかおつきで、遠くをみていました。

馬車が進むにしたがって、どんぐりはだんだん光がうすくなって、まもなく馬車がとまったときは、あたりまえの茶いろのどんぐりに変わっていました。そして、山ねこの黄いろな陣羽織も、別当も、きのこの馬車も、一度に見えなくなつて、一郎はじぶんのうちの前に、どんぐりを入れたますを持って立っていました。

それからあと、山ねこ拝というはがきは、もうきませんでした。やっぱり、出頭すべしと書いてもいいと言えばよかったと、一郎はときどき思うのです。

この文は、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られたデータを利用させていただいています。注意書き・ルビ等は電本座の編集上の都合により省略したり、変更しているものもあります。底本・注意書き・文字データ・校正など詳細を必要とされる方は、青空文庫をご覧ください。